

履 歴 書



ふりがな	かわけ たつのみ	男・女	ふりがな	ぎふけん おおがきし こうふくじちょう	
氏 名	河合 龍憲		現住所	岐阜県大垣市興福地町1丁目77番地	
生年月日	昭和51年7月20日(満28歳)	本籍地	岐阜県		
			郵便番号	〒503-2203	電話 (自宅) 0584-71-1674 (携帯) 090-2687-7188

年	月	学 歴
平成7年	3月	岐阜県立大垣商業高等学校 経理科 卒業
平成7年	4月	朝日大学 経営学部 情報管理学科 入学
平成11年	3月	朝日大学 経営学部 情報管理学科 卒業
平成11年	4月	朝日大学大学院 経営学研究科 情報管理学専攻 博士前期課程 入学
平成13年	3月	朝日大学大学院 経営学研究科 情報管理学専攻 博士前期課程 修了
平成13年	4月	朝日大学大学院 経営学研究科 情報管理学専攻 博士後期課程 入学
平成17年	3月	朝日大学大学院 経営学研究科 情報管理学専攻 博士後期課程 修了 博士(情報管理学)取得

年	月	職 歴
平成13年	4月	岐阜県立山県高等学校 常勤講師
平成14年	3月	岐阜県立山県高等学校 常勤講師 任期満了退職
平成14年	10月	岐阜県立山県高等学校 非常勤講師
平成14年	12月	岐阜県立山県高等学校 非常勤講師 任期満了退職
平成16年	9月	岐阜県立揖斐高等学校 非常勤講師
平成16年	9月	岐阜県立揖斐高等学校 非常勤講師 任期満了退職
平成16年	10月	岐阜県立揖斐高等学校 常勤講師
平成17年	3月	岐阜県立揖斐高等学校 常勤講師 任期満了退職
平成17年	4月	岐阜県立岐阜商業高等学校 常勤講師
		現在に至る

年 月		学会ならびに社会における活動等
平成 13 年	2 月	日本創造学会会員 (現在に至る)
平成 14 年	6 月	プロジェクトマネジメント学会会員 (現在に至る)
平成 14 年	6 月	日本原価計算研究学会会員 (現在に至る)
平成 14 年	8 月	経営情報学会会員 (現在に至る)
平成 14 年	4 月	社団法人日本 VE 協会中部支部主催 「21 世紀の原価企画と VE 研究会」に参加 (平成 16 年 3 月まで)

年 月		賞 罰
		なし
<p>上記のとおり相違ありません。</p> <p>平成 17 年 5 月 29 日</p> <p style="text-align: right;">氏名 河合 龍憲</p>		

教育研究業績書

平成17年5月29日

氏名 河合 龍 憲

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月日	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<p>I 著書</p> <p>(1) ADVANCED PROJECT MANAGEMENT METHODOLOGY with Method for changing Knowledge to wisdom in wisdom management era (英文)</p>	共著	平成14年2月	<p>ASI PRESS (American Supplier Institute)</p> <p>(米国における田口メソッドの教育センター)</p>	<p>(著者) 江崎通彦、河合龍憲</p> <p>(概要) 「参加者の価値観合わせ」から入る「プロジェクトの段階的手順」と「値打のある何をの構成、構造」を創り出す考え方とその手順を述べた江崎通彦(担当教授)オリジナルな著書(文部省の科研費の助成を得て出版 940ページ)</p> <p>(担当) 付録の一部分である Appendix J 及び Appendix K を担当。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Appendix J 「The relationship between QFD, VA/VE and DTCN/DTC methodology」(p.883-892) ・ Appendix K 「The Method of Project Management/Accounting Using Reversed Journal Position Format -The Method to Create a Co-operative thinking and Working Place Among Science/Engineering and Management/Accounting people-」(p.893-906)
<p>II 博士論文</p>	単著	平成17年1月	朝日大学 大学院	<p>学位論文内容の要旨</p> <p>従来の企業、官庁などの組織において、マネジメント上の問題点に次のものがあつた。</p> <p>(1) 技術者、科学者の中には、会計(財務会計、管理会計)のことをよく理解し、それを有効に利用できる人が少ない。</p> <p>(2) また、財務担当の専門家は、会計のことはよく理解できている一方で、その会計数値の技術的、科学的な意味、作業内容と手順、その詳細で微妙な因果関係について関心を持つ人が少ない。</p> <p>(3) 管理会計の分野において、プロジェクト管理会計という言葉が使われているが、その内容についてはまだ十分確立されていない。</p> <p>本論文は、上記の問題点を解決するための視点、プロセスおよびその考え方と手順を示し、それで得られる、新しい効果についての研究の結果を述べたものである。</p>

これらの問題点を解決する糸口となる着想の視点は、従来会計において利用している仕訳表現である「借方－貸方」を、内容は全く同じでも、左から右へインプット、アウトプットの順序で手順などを、読みだり書いたりすることに慣れている技術者、科学者に理解しやすい表現にするために、便宜的にコンピュータなどの助けを借りて、「貸方－借方」の仕訳表現に置き換ると、その流れの理解を広げることができることに着眼している。そして、技術者、科学者が、慣れている左から右へインプットとアウトプットの流れの各作業内容と仕訳表現が的一对一対応できることを確認するとともに、それを使って、技術者、財務担当が共に、視考（見て理解し、見て考える）できるようにすることを、論文の中で、確認している。

また、本論文は、実務で利用されている「新プロジェクト管理の方法 (DTCN/DTC 手法 : Design To Customers' Needs/ Design To Cost)」と「知識を知恵にかえる方法」の考え方とその手順に基づき、「帰納アプローチ段階」と「演繹アプローチ段階」という用語定義を用いてその内容の展開をしている。本論文において「帰納アプローチ段階」とは、「いろいろ考えてこうしようと決める段階」を指し、また「演繹アプローチ段階」とは「いろいろ考え、決めたことを具体化する段階」を指すとしている。そして、本論文の論ずる範囲は、帰納アプローチ段階であるとしている。この段階は、「何事も、その実現のためには、まず1案しかありえないことは極めて稀で、必ず2案以上がある」という考え方から、その比較案の創出、比較、評価、選択をする段階であると認識し、これにより価値が高く、しかもそれができるだけ低いコストで実現できるプロジェクトの結果の内容の創出と選択ができる原点となる段階でもあると説明している。

そして、この「帰納アプローチ段階」で選択した価値とその内容にもとづいて実施される「演繹アプローチ段階」の生産、商売、サービスなどについての具体的な予算と実績の管理については、従来のVE、IE、QC手法から始まる管理手法の考え方と手順にしたがって行えばよいとしている。従って、本論文ではその段階の範囲の管理については、それらに関する従来に方法によればよいとしている。

<p>(1) VE/VA,QFD,DTCN/DTC 手法と管理会計手法との新しい関係 (査読済み論文)</p>	共 著	平成 13 年 12 月	朝日大学大学院経営学研究科紀要第 3 号	<p>(著者) 江崎通彦、河合龍憲 (概要) VE/VA 手法の発展型として、VE/VA 手法の考案者であるローレンス.D.マイルズの了承を得て、江崎通彦が考案した DTCN/DTC 手法の歴史及び VE/VA、QFD、DTCN/DTC 手法の相互の関係を明らかにし、それらの各手法と管理会計手法を繋ぐことにより新しい関係が見えてきたことについての論文である。 (担当) 管理会計に関連する部分の執筆 (p.75-88)</p>
<p>(2) 技術者にもわかり易い「知恵を創り出す管理会計理論」の着想 (査読済み論文)</p>	単 著	平成 14 年 12 月	日本創造学会論文誌 Vol.6	<p>(概要) 江崎通彦が考案した「知識を知恵にかえる方法」を利用して、創造学の観点から、効果のある企業経営をするために、技術者の協力の得やすい管理会計理論の着想について述べたものである。 本論文により、財務面と技術面からの創造的で知恵のある協力関係を引き出すことができる管理会計の原点ができあがった。 (p.89-98)</p>
<p>(3) 知恵を創り出す管理会計手法の考え方とその手順—その 1— (査読済み論文)</p>	単 著	平成 14 年 12 月	朝日大学大学院紀要第 4 号	<p>(概要) 「新しい管理会計の考え方」と「手順の場と共創の場」を創り出すことができる「知恵を創り出す管理会計手法」の考え方とその手順の概要を述べたものである。 (p.17-29)</p>
<p>(4) 従来の会計の仕訳の左右の位置を逆に使うプロジェクト管理/会計の方法 —技術系、事務系の人達の共創、共同作業の場を創り出す方法— (査読済み論文)</p>	共 著	平成 15 年 2 月	プロジェクトマネジメント学会誌 Vol. 5 No. 1	<p>(著者) 河合龍憲、江崎通彦 (概要) 技術系、事務系の人達が効果的・効率的に価値の高いプロジェクトの結果を共同で創り出すために、共に考え行動のできるプロジェクト管理と管理会計上における仕訳の表現の考え方、メカニズム、手順創りへの道をひらく可能性の原点を示す論文である。 (担当) 全文を担当。(p.29-35)</p>
<p>IV 学会発表論文</p>				
<p>(1) 従来の会計の仕訳の左右の位置を逆に使うプロジェクト管理/会計の方法 —理工系、経営・事務系の人達の共創、共同作業の場を創り出す方法—</p>	共 著	平成 13 年 9 月	2001 年度秋季研究発表大会予稿集 (プロジェクトマネジメント学会)	<p>(著者) 河合龍憲、江崎通彦 (概要) 従来の仕訳の表現である「借方 - 貸方」の位置を「貸方 - 借方」に置き換えることにより、理工系の人達に理解のしやすい仕訳の表現となる。その結果、理工系、経営・事務系の人達が同じ場とフローで共創、共同作業ができるようになることについての発表をした。 (担当) 全文を担当。(p.117-123)</p>

<p>(2) The Relationship between QFD, VAVE and DTCN/DTC methodology (査読あり)</p>	単 著	平成 13 年 10 月	<p>Proceedings of The 7th International Symposium on Quality Function Deployment (品質機能展開国際シンポジウム)</p>	<p>(概要) QFD 手法の考案者である赤尾洋二は、彼の著書『品質展開』, 日科技連, 1978 年の中で、「VE 手法とどのように結合させるか、どの時点から導入すればよいかは、いまだ確立されたものはない。」と述べている。 本論文は、今まで明らかにされていなかった QFD 手法、VAVE 手法の関係に、DTCN/DTC 手法 (江崎通彦考案) を加え、それらの相互の関係と補完手順を英文で発表をした。 なお、本論文の内容は、赤尾 (QFD 手法)、江崎 (DTCN/DTC) の両氏の立会いのもとによる内容確認、調整済みのものである。 (p.95-99)</p>
<p>(3) QFD 手法、VAVE 手法、DTCN/DTC 手法の創造的關係</p>	単 著	平成 13 年 11 月	<p>日本創造学会第 23 回研究大会論文集 (日本創造学会)</p>	<p>(概要) 前記学会発表論文 (2) の内容を創造学からの視点を加え、日本語で発表をした。 (p.126-130)</p>
<p>(4) 理系の人にもわかり易い知識を知恵にかえる方法とそのツールによる会計理論の着想</p>	単 著	平成 13 年 11 月	<p>日本創造学会第 23 回研究大会論文集 (日本創造学会)</p>	<p>(概要) 従来、企業や官庁の組織の中で、文系 (経営/財務担当者) の人と理系 (技術系) が、お互いの仕事の内容を同じ場/紙 (書式などのことを指す) の上で、それぞれの専門的な表現をして、共創的な作業のできる場が欲しいというニーズがあった。 本論文は、理系の人にもわかり易い管理会計上における仕訳の表現と江崎通彦が考案した「知識を知恵にかえる方法」の考え方とそのツールを結合することによりそのニーズに答えることができることについて創造学からの視点からまとめたものである。 (p.115-120)</p>
<p>(5) 知恵を創り出す管理会計手法の確立 (考え方とその手順)</p>	共 著	平成 14 年 8 月	<p>日本原価計算研究学会第 28 回全国大会研究報告要旨集 (日本原価計算研究学会)</p>	<p>(著者) 河合龍憲、江崎通彦 (概要) 前記学会発表論文 (1)、(4) の内容と、「知識を知恵にかえる方法」(江崎通彦考案) を繋ぎ合わせることにより、「知恵を創り出す管理会計手法」として展開することができることについて管理会計分野の学会において発表をした。 (担当) 全文を担当。(p.17-18)</p>
<p>(6) 評価をするということはどういうことか —評価とは何をしさえすれば評価をしたことになるのか—</p>	共 著	平成 14 年 9 月	<p>日本創造学会第 24 回研究大会論文集 (日本創造学会)</p>	<p>(著者) 河合龍憲、江崎通彦 (概要) 「評価をする」という言葉と「評価基準を持つ」という言葉の内容について、「何をどうしさえすれば評価をしたことになるのか?」「評価をするための評価基準とはどのようなものを持ちさえすればよいのか?」について多くの論文が見られるが、その決め手になるものはまだほとんど見当たらない。 本論文は、江崎が先に開発、実用化した</p>

				『新プロジェクト管理の方法 (DTCN/DTC : Design To Customers' Needs/Design To Cost)』の中の PMD (Purpose Measure Diagram) 手法を利用して、「意思決定のために評価をする」ということは、「何を基準に何をすればよいか」について整理を行い発表したものである。 (担当) 全文を担当。(p.99-104)
(7) 評価をするということは何をどうすることか	単 著	平成 14 年 11 月	2002 年度秋季全国研究発表大会予稿集 (経営情報学会)	(概要) 前記学会発表論文 (6) の内容を更に充実させ、発表をした。 (p.90-93)
(8) 理工系の人にわかりやすい新しいパラダイムを開く管理会計の方法	単 著	平成 14 年 11 月	2002 年度秋季全国研究発表大会予稿集 (経営情報学会)	(概要) 前記学会発表論文 (7) の評価について整理した内容を踏まえた上で、理工系の人にわかりやすい管理会計上の仕訳の表現を利用すると管理会計の新しいパラダイムを開くことができることについての発表をした。 (p.94-97)
(9) 知恵を創り出す管理会計手法の着想	共 著	平成 15 年 6 月	2003 年度春季全国研究発表大会予稿集 (経営情報学会)	(著者) 河合龍憲、江崎通彦 (概要) 「知恵を創り出す管理会計手法」で利用する PMD 手法 (目的手段ダイアグラム手法) を使って、「バランス・スコアカードの 4 つの視点」の整理を行い、その PMD をもとに、ステップリスト手法を利用して、手順を作成し、「知恵を創り出す管理会計」と「バランス・スコアカード」の関係を明らかにしたことについての発表をした。 (担当) 全文を担当。(p.146-149)
(10) 知恵を創り出す管理会計手法と日本的なバランス・スコアカードの考え方の結合	共 著	平成 15 年 9 月	日本原価計算研究会第 29 回全国大会研究報告要旨集 (日本原価計算研究会)	(著者) 河合龍憲、江崎通彦 (概要) 昨年、日本原価計算研究会で発表した内容 (前記学会発表論文 (5)) を踏まえて、「知恵を創り出す管理会計手法」の視点から、「バランス・スコアカードの 4 つの視点」の整理を行い、その整理した視点にもとづき、それを具体化する手順を作成して、「知恵を創り出す管理会計手法」による費目の考え方について発表をした。 (担当) 全文を担当。(p.15-16)
(11) 段階的作業に創造性を発揮させるための予算を強制的に割り付け実施させる考え方とその手順	共 著	平成 15 年 10 月	日本創造学会第 25 回研究大会論文集 (日本創造学会)	(著者) 河合龍憲、江崎通彦 (概要) 従来、企業のプロジェクトの各段階的作業において、各種創造技法を有効かつ効果的に使い、効果的で効率的なプロジェクトの成果を予算、管理会計の面から強制的に関係者に行なわせる方法 (考え方とその手順) がなかった。 本発表は、創造学会論文誌 vol.6 において江崎通彦が発表した『「知識を知恵にかえる方法」の基礎理論と「ウィズダム・エンジン」』、および河合龍憲が発表した『技術者にもわかり易い「知恵を創り出す管理会計理論」の着想』(前記学術論文 (2)) の考え方とその手順を基礎として、その問題を解決できるようになることについての発表をした。

<p>(12) バランス・スコアカードの方法に直結する「知恵を創り出す管理会計理論」の考え方とその実施手順</p>	<p>共 著</p>	<p>平成 15 年 10 月</p>	<p>日本創造学会第 25 回研究大会論文集 (日本創造学会)</p>	<p>(担当) 全文を担当。(p.132-135)</p> <p>(著者) 河合龍憲、江崎通彦 (概要) 上記学会発表論文 (9)、(10) の内容を創造学の観点から考察してまとめたものを発表した。 (担当) 全文を担当。(p.136-139)</p>
<p>(13) 知恵を創り出す管理会計手法の構造・構成</p>	<p>共 著</p>	<p>平成 15 年 11 月</p>	<p>2003 年度秋季全国研究発表大会予稿集 (経営情報学会)</p>	<p>(著者) 河合龍憲、江崎通彦 (概要) 前回、経営情報学会 2003 年春季全国研究発表大会において「知恵を創り出す管理会計手法の着想」(前記学会発表論文 (9)) の発表を行なった。 本発表は、その着想を構造・構成の段階まで進めた成果の発表をするものである。 本発表により、各種の創造技法、管理技法及び知恵を創り出す管理会計手法をつなぎ合わせた統合手法の位置付けができたと考えている。 また、これにより戦略的な技術と管理会計が結びつく戦略 ABC 会計の基本の枠組みを与えることについての発表をした。 (担当) 全文を担当。(p.350-353)</p>